

F-14 専業農家の生活構造の変容 — 世帯類型転換の動機について  
北海道教育大 清野きみ

1 農家世帯においては直系親族の縦のつながりによる子のひとりか、結婚後も生まれた家族に同居し主要家産を継承していくいわゆる「両親と子供夫婦または未婚の孫」の形態が支配的であったが、近年農村から都市へと人口流出が激しくなり一世帯当りの規模の縮少が目立ってきている。農家の生活の基本としての稼得構造すなわち根幹労働力である農家世帯主の支替がいかなる事情によるか、何が契機となっているかを、世帯類型転換の突情から調査した。

2 世帯類型転換は、昭和42年、46年の経年比較、対象地は、北海道上磯町字清川、中野、野崎部落の専業農家134戸である。世帯主はすべて、年150日以上農業に従事していたものである。

3 ① 134戸のうち16世帯に、世帯類型の増減がある。  
② 転換内容は、総数の29.1%にあたる39戸についてみられる。  
③ 46年I、II、III類型の核的家族世帯は42年53%から47.1%に減り、反対にIV、V、VI類型の拡大世帯は増えている。  
④ 世帯主転換の動機は、世帯主の死亡(14)結婚(10)他出(6)協議による世帯主変更(5)別居を解消して戻ってきたもの(3)離婚(1)である。先に調査した専業農家では、先令者の死亡が大部分を占めていたのに比べると、多様な家族事情がその事項となっている。

42年 \ 46年	I	II	III	IV	V	VI	計
I 型	4 <sub>△</sub>	-	1	4	1	7	5 <sub>(3)</sub>
II 型	1	-	-	-	-	2	3 <sub>(3)</sub>
III 型	-	-	5 <sub>△</sub>	-	1	3	9 <sub>(4)</sub>
IV 型	1	-	-	5 <sub>△</sub>	-	5	11 <sub>(6)</sub>
V 型	-	-	-	-	1 <sub>△</sub>	-	1
VI 型	7	2	-	4	-	38 <sub>△</sub>	51 <sub>(33)</sub>
同型	46	-	5	5	1	38	95 <sub>(67)</sub>
計	55	2	6	13	3	55	134

△ 42~46年同型、( ) 世帯主転換数